

自律的学習を促す学習者主体の英語学習環境の構築に向けて

The importance of Rotating Seating Assignments

早稲田大学 法学学術院 教授 (法学部 英語・言語情報副専攻担当)

原田 康也 (harada@waseda.jp)

1. はじめに

筆者は英語教育の本質は英語運用力の向上にあるという立場から早稲田大学法学部における授業実践を進めて来たが、英語による知的な対話のため『足場かけ』として、名刺サイズのカードに印刷した質問文を読み上げる質問者と、カードを見ることなく質問を聞いて応答する回答者と、時間配分を確認するタイムキーパーの三者の役割交代に基づくゲーム的な口頭での応答練習を提案した。¹ この練習の付随的な効果として、意見交換の時間が楽しく、言葉を交わしたことのなかったクラスメートと話をするきっかけとなり、結果的にクラス内に『新しい友人ができた』とする学生が毎年数多く存在する。こうしたクラス内の良好な人間関係と、これに続く少人数でのグループ作業によって、受講生たちが相互に助け合いながら、自律的に英語を学ぶ様子を示唆する資料が少しずつ集まりつつある。²

2. 早稲田大学法学部の英語カリキュラム

文部科学省が 2002 年 7 月に策定・公表した『英語が使える日本人』戦略構想³ や 2003 年 3 月に公表した同「行動計画」などに見られるように、英語の運用能力に対する社会の期待がますます高まっている。早稲田大学においては、上記の戦略構想策定・公表に先立つこと 2 年、『21 世紀の教育研究グランドデザイン策定委員会英語教育ワーキンググループ(委員長: 田辺洋二教育学部教授(当時))の最終答申(2000 年 7 月報告)』の中で『「議論ができる英語」教育の実施』がうたわれ、これが下記の Tutorial English Program 実施の一つの契機となっている。

全国的な法科大学院(いわゆるロー・スクール)設置動向をにらんだ法務研究科の新設にともなう法律科目担当教員の大幅な減員という外的要因と、国際教養学部の新設に伴う英語担当教員の一部移籍という内的な要因をあわせて、早稲田大学法学部では 2004 年度から教員構成が大きく変わるとともに入学定員も変更されることとなり、これにあわせてカリキュラムを大きく改定した。英語に関しては、各クラス 30 名程度を上限とし、1 年前期に Bridge1 を 2 コマ必修(日本人教員担当 1 コマ、ネイティブ教員担当 1 コマ)、1 年後期に Gate を 2 コマ必修(日本人教員担当 1 コマ、ネイティブ教員担当 1 コマ)ならびに Bridge2 としてオープン教育センター設置チュートリアル・イングリッシュ(受講生最大 4 名に対してチューター一人ですべて口頭英語の運用能力訓練を行う)を必修とし、2 年前期・後期については Theme を 2 コマ必修(日本人教員・ネイティブ教員担当)、インテンシブ・コースを選択した学生はこれに加えて 2 年前期・後期に Intensive Theme (主にネイティブ教員が週 2 回担当)を受講することとした。

¹ [2], [5]などを参照。

² [1], [2], [4], [5]などを参照。

3. 『出会い系』の学習活動

法学部新生の多くは大学受験を英語学習の主な目標として高校生活を送ってきている。このため、英語を中心として作文や口頭での発表も含めた統合的な学習活動を行おうとすると、基礎的な訓練を丁寧に進める必要がある。一方で、受験形態はさまざまでも、長期にわたる海外での学校生活を経験してきた学生も、筆者が担当する授業でのアンケートからすると、1割から2割前後は在籍している。英語のクラスを（中国語、ドイツ語、フランス語などの）未習外国語のクラス編成に基づいて構成するため、筆者が以前に行った調査では、SET-10のスコアで30点台から80点まで、TOEICのスコアで300点前後から900点を超える学生までが一つのクラスに混在している。³ こうしたことから、筆者は上記のマルチカードを利用した応答練習を一つのきっかけとして、応答練習の内容を思い出しつつ400語を目標に作文をWordでまとめ、6人程度の学生がプリントアウトに相互にコメントを付して採点して返却し、これに基づいて修正した作文を提出する作業を1年前期のBridgeのクラスにて行っている。1年後期のGateのクラスでは、この作文に先立って、応答練習の内容を思い出しながらPowerPointで2,3枚のスライドを作成し、6名ほどのグループで相互に発表するという作業を行った後、作文の作業に入るようにしている。

4. 『出会い』を促す Rotating Seating Assignment

応答練習に先立つプリントに基づく練習も含めて、授業においては、2人ずつの作業、3人ずつの作業、6人ずつの作業、3人から5人までの小グループを自分たちで構成して行う発表準備とレポート作成作業など、多くの学習活動を複数の受講生の組み合わせで行うこととしているが、受講生自らがグループを構成する場合を除いて、作業効率の関係からも座席配置に基づく構成とせざるを得ない。学生を自由に着席させると、すでに親しくなっている学生が隣り合って座る傾向が強く、学期を通じた固定座席だと限られた交流関係に限定され、組み合わせが悪いと動機付けが悪化するため、2004年度の授業からは出席番号に基づいて、毎回の座席配置が（組み合わせとして）変わるようにしている。⁴

6. 参考文献

[1] 原田康也, 「電話を利用した英語リスニング・スピーキング自動テスト: 早稲田大学法学部1年生のスコアからの考察」, 電子情報通信学会技術報告(信学技報) TL2002-41, pp. 49-54, 電子情報通信学会, 2002年12月6日.

[2] 原田康也, 「口頭表現力向上を目指したマルチカードによる英語応答練習」, 大学英語教育学会第42回全国大会予稿集, pp. 49-50, 大学英語教育学会, 2003年9月5日.

[3] 原田康也, 「早稲田大学法学部の英語カリキュラム改編と統合的課題を中心とした英語授業実践」, 平成16年度大学情報化全国大会資料集, pp. 202-203, 社団法人私立大学情報教育協会, 2004年9月7日.

[4] 原田康也, 「パネル・ディスカッション話題提起: 学生主体の学習活動におけるコミュニティ形成支援ならびにプロジェクト進行管理支援」, 平成16年度情報処理教育研究集会講演論文集, pp. vii-x, 名古屋大学主催・文部科学省後援, 2004年11月26日.

[5] 原田康也・辰己丈夫・前野譲二・楠元範明・鈴木陽一郎, 『対面応答を重視した英語学習活動と発話収録装置の試作』, 平成17年度情報処理教育研究集会講演論文集, pp. 487-490, 九州大学主催, 2005年11月4日.

³ [1]などを参照。

⁴ このrotating seating assignmentは学生には予想以上に好評で、クラスコンパの席においてまで、時間の途中で『座席配置変更』を宣言する幹事が現れるほどである。